



林 美佐

小美玉市小川文化センター(アピオス)

文化の力でまちを元気に

「小美玉市まるごと文化ホールの座談会」で常と感じたのは、みんな自分の住むまちに愛着があって、そのまちが元気になることへの想いがあふれていることです。

文化は生活には直接必要無いのかもしれませんが、文化の持つ力でたくさんの人たちの心をつなぎ、心が豊かになって、まちづくりにつながっていくことによって、自分の住むまちに活気が生まれ、愛着が湧き、親から子へと受け継がれていく手段には必要不可欠です。

これまで小川文化センターアピオスでは、東京から一流の方を呼んで、住民への鑑賞の機会を提供してきましたが、平成20年度の国民文化祭をきっかけとして、住民参画を取り入れて改革をしてきました。

「小美玉発！スター☆なりきり歌謡ショー」もその1つで、ステージに立って歌うのは一般の方で、あとはプロがバックアップして本格的なステージをつくる企画です。自分を応援する観客を30人連れて来るのが参加条件の1つになっており、応援合戦も見ものですが、一般の方が出演する公演にもかかわらず、チケットが完売してしまうほどの人気です。

また、「この企画を通してここに住む人たちをつなげたい。このショーと一緒につくっていく」という主旨をご理解いただいた地元の企業・団体に協賛をいただいております。

この企画によって、アピオスに来たことの無い方が、自分の知り合いを応援するのに訪れ、また公演を観た人の中には、次は私もこのステージに出ようと思ひ、また応援する人たちを連れて来る。そして協賛企業・団体を紹介することによって、地元の企業・団体を理解することにもつながっていく。

今回の座談会で、蓮見先生が言われた“きれいな水の中では、限られた生物しか住めない。”“超一流を目指すなら、超一流を連れてくれば良い。”“「小美玉らしさ」＝真似の出来ない多様性のある、そしてクオリティーの高いものを目指して、3館それぞれの個性を出していかなければならない”と言われたのが印象に残り、まさにこういうことなのかなと思いました。

また、生活文化課では、芸術文化にふれたことのない子どもたちに、芸術文化に触れる機会を与えていく「学校アクティビティ事業」を現在行っておりますが、今回の座談会で、群馬交響楽団の戦後からの活動の歴史の話をお聞きして、結果が出るまで時間はかかりますが、「学校アクティビティ事業」が次の世代を育て、良い人材が育てば豊かな地域(まち)へとつながっていく、そんな仕事をしているのだと実感し、改めて自分たちがやっていることが、必要なものなのだと再認識しました。

地方は都会とは違って、地に根をはって花を咲かせることが大切で、地にしっかりと根をはるまでは時間がかかりますが、しっかりと根をはれば強くなれる。小美玉市にもしっかりと芸術文化の根がはれるようにしていかなければならないと感じました。

我々職員が、そういったことを理解した上で事業を進め、またそれを少しでも多くの住民の方々に知っていただきつなげていく、そして小美玉市が元気なまちになるようにこれからも努力していきたいです。



長谷川正幸

小美玉市四季文化館(みの〜れ)

文化ホールは人づくりの場

今回、蓮見先生を中心に、プロジェクトメンバーの皆さんとともに「まるごと文化ホール計画」を作成していくという貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

蓮見先生の講義を聞いたり、時には講師の先生を招いて経験談や事例のお話を伺ったり、メンバーの皆さんとワークショップ等をやりながら計画作りをしてきましたが、自分としては毎日が新鮮で大変勉強になりました。

平成18年に旧小川町・旧美野里町・旧玉里村が合併して小美玉市が誕生し、6年目になります。合併当初は、旧町村の行政サービスの違いなどもあり住民の方々も、負の意識が強かったように感じます。それまでの歴史や環境などの違いもあり仕方がないことなのかも知れません。しかし、時間とともにお互いを知ることにより、だんだんと前向きに考える人が増えてきたように思います。

市内には3箇所の文化ホールがあり、建設された経緯も違い、そこに関わる人たちの考え方や思いも当然違います。私は、昨年の4月から四季文化館(みの〜れ)に配属になりました。住民主導で建設され、運営されていることは聞いていましたが内容的なところはあまり知りませんでした。みの〜れに行って、子供たちからお年寄りまで年齢に関わらず人の出入りが多いことと、みんながすごく元気で、誰に対しても自然に笑顔であいさつしていることに驚かされました。自分の子供の頃は、それが当たり前で、いまは地域のコミュニティが少なくなってきたように思います。

今回、いろいろな方のお話を聞いて、「住民主役・行政支援」という文化が、地域の活性化、理想的なまちづくりにつながっていくと改めて感じました。

「まちづくり」には、まずそこに住む人づくりをすることが大事であり、人づくりのための一つの手段とし文化ホールが活用されることが望ましいと思います。

そのために少しでも役に立てればと思っています。



中本正樹

小美玉市小川文化センター(アピオス)

生まれ育ったこの地に誇りを

私の父は、兄と私をプロ野球選手にするのが1番の夢でした。2番目の夢は、自分の夢だった小学校の先生。この夢は兄が叶えました。

私たち兄弟が少年野球チーム「江戸スワローズ」に所属していた頃、父は監督を務めていました。その父を中心に、コーチ・保護者で作ったソフトボールチームが「W(ダブル)オーバース」。みんなお腹が出ていて、「ウェイトオーバーのおじさんたちの集まりだったから」というのがチーム名の由来です。

あれからかれこれ25年は経ちますが、当時の少年野球の仲間たちが父たちのチームに入り、2世代で活動しています。少年野球で鍛えられた仲間が揃い、学生時代にソフトボールのピッチャーを経験してきている仲間もいて、なかなか強いチームなのです。教え子たちが活躍してWオーバースを強くするのが父の3番目の夢でした。父が満足そうですから、叶えられているのでしょう。

2世代揃って、という話。次男坊の私が地元に残ろうと思った最も大きな理由は、このWオーバースの存在だったのです。地元で自分の居場所がある。仲間たちが揃っていて、それを望む親たちがいる。

文化も同じだと思うのです。みの〜れを誕生させようとした住民の人たちは、「みの〜れは子どもたちの文化活動の受け皿になってほしい」という想いを持っていました。美野里中の文化部(団体)は演劇部と吹奏楽部。ここのOBたちは、水戸や土浦・つくばまで行かないと活動の受け皿がないことから、ほとんどが活動を辞めてしまっていました。こんな背景から、住民劇団・住民楽団はみの〜れ誕生と同時に課せられた使命でした。

大人になっても自分が本気になって活動できる場所があるということは、手塩にかけてまちぐるみで誇りを持って育ててきた子どもたちがこの地に住みつく理由の一つになるのでは、と、私の実体験から強く思うのです。

文化ホールは人が成長する場であり、人が想いを寄せる場でもあり、生まれ育った土地に誇りを持つことにつながる。そして手塩にかけて育てた子たちがこの地を支えて、日本を支えていく。そんな素敵なサイクルが、とって実感できている今日この頃。この仕事に携われていることに、あらためて感謝しています。



関 秀樹

小美玉市生涯学習センター(コスモス)

3つの宝箱

合併し、3つの文化施設をもつ小美玉市。この文化施設をまちづくり・人づくり・交流の道具として、いかに有効に活用していくかは大きなテーマです。

3つの施設にはそれぞれの顔があります。

1,200席のキャパシティがあり、多人数の催しが開催できる小川文化センターアピオス。住民組織が活発に活動し、事業の企画決定や実施に積極的に関わっている四季文化館(みの〜れ)。図書館・公民館・史料館・ホールの複合施設で、市内の公民館(類似施設を含む)を統括し生涯学習の拠点となっている生涯学習センターコスモス。

これらの施設は確かに箱ですが、市民や地域の皆さんが愛着を感じ誇りに思える施設になれば、心のよりどころ・小美玉市のシンボルになります。

ここに人が集い交流することで、生きがいや喜びが生まれ、明日を頑張るモチベーションとなり、まちが明るく元気になります。

この箱の使い方によっては、ただの箱のままでもあり、あるいは魔法の宝箱にも変わります。

ただの箱をどうやって魔法の宝箱に変えていくのか。それには、ここに関わる住民の皆さんや職員の、様々なアイデアや仕掛けが必要不可欠です。

どうしても目先の事業を“どうやって無事に開催するか”ということだけを考えがちですが、“この事業をどのようにしてまちづくりにつなげていくか・どんな楽しい仕掛けを作ろうか”という意識で考えていけば、私たちの手で魔法の宝箱に変えることができます。

多くの人達がそれぞれの目的で宝箱に集まり、楽しみ交流し沢山の出会いが生まれれば施設もまちも元気になります。

小美玉市のあちこちで身近に芸術文化に触れることができ、10年後も20年後も、3つの宝箱(文化施設)がまちづくりの拠点として輝き続け、明るく元気な笑顔で満ち溢れていたなら、この「小美玉市まるごと文化ホール」プロジェクトは大成功だと思います。

これからも、何らかのかたちでこの“魔法の宝箱”にかかわっていきたいと思います。



清水弘司

小美玉市四季文化館(みの〜れ)

物語に溢れるまちに

これまでの、小美玉市まるごと文化ホール計画で行なった様々なディスカッション・シンポジウム・座談会で再発見したことがいくつもある。

それはプロジェクトメンバーそれぞれが自分の関わっている事業や取り組みがどんなに素晴らしいことかという自信を持っている、そして、さらに良くするためには何がいいのか悩んでいる。

それはまるで館長のように考えている。

プロジェクトメンバーそれぞれが、自分の基盤とする「ホール」の現状を変えるには、より活性化するにはということを感じているのだと感じた。

「ホール＝人」

それは、3館に関わる人それぞれが、ホールということ。

つまり、小美玉市に3館あるのはホールではなく、3館それぞれに関わる特色のある「人材」という捉え方をするということ。

その3館にある人材が交流する。

みの〜れで始まった「物語」の第2章がコスモスでスタートする。

その物語を見た人がアピオスで「物語」をスタートする

それは、住民が一人の作家のように

「物語」を書き終えた作家は、他の作家の「物語」を読む「読み手」であり、自分の「物語」を伝える「伝え手」になっていく。

そんな「物語」を発行する行政

それは、出版社のように

作家である住民にネタをという「交流」する場を作り、「物語」を製本するため「社会的役割」という校正をする。

けれど、あくまで「出版社」

でも、お金という「社会資本」が欲しい「出版社」

だからこそ、「裏方」

だからこそ、「支援」

そんな物語を増やしていくこと

そんな物語を多く出版していくこと

10年後、20年後そんな「物語」で溢れている小美玉市であって欲しい。



沼田譲治

小美玉市四季文化館(みの〜れ)

熱意×想＝人の心を動かす

このプロジェクトチームの会議を通して、プロジェクトチームメンバーやゲストの話聞き、共通している部分を自分なりに考えてみました。

「この地域を良くしたい」「このイベントを成功させたい」という【熱意と想】です。

【熱意と想】を持っている人の話は、聞き手の心を揺り動かします。そして熱意と想いを波及させます。それが「ビッグウェーブ」になって、地域を輝かせたり、イベントを成功に導いたりするのだと感じました。

四季文化館(みの〜れ)には、多くの住民が参画しています。なぜこんなに多くの住民が、みの〜れに足しげく来ていただけるか？それは館長や職員に【熱意と想】があり、「館長(職員)の為だったら一肌脱いでやろう」と感じているからだと思います。逆に「住民が頑張っているんだったら、給料をもらっている職員はもっと頑張らないといけない」と必然的な発想が出てきませんか？その住民と職員の信頼関係で、みの〜れは様々な山あり谷ありを乗り越えられたのだと考えます。

今よりも「ちょっと」気遣いをしてみてください。

今よりも「ちょっと」丁寧な対応をしてみてください。

今よりも「ちょっと」様々なことに興味を抱いてみてください。

今よりも「ちょっと」が良いです。その「ちょっと」の積み重ねをすることによって、【熱意と想】に変わり、【人の心を動かす】、10年後の小美玉市が今よりさらに輝いていることを祈念します。